

マカオが一部を管理する珠海横琴新区

須賀 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

1979年に始まった中国の改革開放政策。その目玉として4つの経済特区が設立されてから30年以上が過ぎた。当初わずか数万人であったシンセンは今や1000万人口を抱える巨大都市に変貌し、改革開放の象徴とも言うべき発展を遂げた。一方広東省と福建省の沿岸部にあるアモイとスワトウ。この2つの特区は当初は華僑からの投資が進んだが、その後密輸や汚職問題で発展から取り残されていく。

そしてもう一つの特区、それが珠海。シンセン同様広東省にあり、マカオとは陸続き、香港からフェリーで1時間ちょっとという立地にあるが、現在の発展段階はシンセンとアモイの間ぐらいであろうか。今回はこの珠海の新しい動きを紹介したい。

珠 海

珠海と言えば、シンセンなどとは異なり、実に穏やかでのんびりした街という印象がある。香港駐在時代は週末によくゴルフコンペにも出掛け、ついでに安くて美味しい海鮮料理を食べ、脚マッサージな

どを格安で受けて帰ってくる、いわば近場のリゾート地であった。

香港人の中には、香港やシンセンに比べて価格が安い不動産に目を付け、ここにセカンドハウスを購入、週末を優雅に過ごしている人々もいる。近年急速に値上がりしている中国の不動産価格だが、ここ珠海では他の大都市に比べると、まだまだ安いと、地元の人々は言う。現在は以前建てた建物を改築して価値を高めるなど、香港に続けとばかりに不動産のテコ入れを行っているようだ。

産業は適度に工場などがあり、日本からもキャノンやキリンビールなど大手企業の進出があるものの、印象としては、マカオへのゲートウエーとしての観光業などの位置付けだけが目立ってしまう。確かに中国人のマカオ渡航解禁以降、多くの観光客がカジノを目指して珠海から陸のボーダーを越え、マカオに押し寄せた。中には多額の損失を出す者、汚職が発覚して捕まる者など、悲喜こもごものドラマもあったらしい。

香港・珠海・マカオ大橋

香港空港のあるランタオ島からマカオ、更には珠海まで橋を掛ける、こんな構想が30年も前から囁かれていた。全長35km、海底トンネルを掘るほか、2つの人工島を作り、橋を架けていく計画だが、当初は夢のように実現不可能と思われていた。2000年以降、香港と中国本土の一体化を推進するため、計画が再浮上。工事が着工されている。

もしこの橋が繋がれば、30分で香港から珠海へ行くことが出来、人的往来に加え、物の流れの起点に



写真1 珠海の有名海鮮レストラン



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。



も成り得ることから、珠海の価値は高まるものと考えられる。危機感を持ったシンセンはこの橋の一部をシンセンに繋げる提案をしたが、香港・珠海とも拒否したようだ。その重要性がこれからも分かる。2015年頃、完成の目途が立つと言われているが、実際に開通した場合の通行料金、出入国手続きなどができるようになるのか、本当に便利なのかに関心が集まっている。



写真2 横琴新区 急ピッチで進むマカオ大学建設

横琴新区

もう一つ、珠海で起こっていること、それが横琴新区プロジェクトだ。横琴新区は、2008年に国务院で批准された「珠江デルタ発展計画」の重点プロジェクトの一つであり、第12次5カ年計画でもシンセンの前海協力区などとともに、広東省・香港・マカオの協力による経済発展のモデル地区となっている。

場所は珠海市南部、珠江河口の西岸、マカオと橋を隔てて隣接する島で、対岸のマカオはすぐ目の前にあり、フェリーに乗れば数分でマカオに着いてしまう距離である。総面積は106km²（マカオの4倍以上）、ビジネスサービス、レジャー観光、科学技術・研究開発、ハイテクの4分野を重点産業としている。マカオ - 横琴間の通関を大幅に簡素化するなど、横琴を珠海特区の中の特区と位置づけ、香港、マカオとの一体化を図っていく予定。

先日新区を訪れると、大規模な開発がどんどん進んでおり、土ぼこりがあちこちで舞い上がり、急ピッチで推進されている様子が伺えた。中でも目の惹くのがマカオ大学。大学のキャンパスを横琴に移転し、管理はマカオ側が行うとのことから、画期的なプロジェクトと注目され、鉄入れ式には胡錦濤総

書記自らが行うほどの力の入れようを見せている。

このような巨大プロジェクトでは、以前は日本などの外資企業誘致が盛んに行われていたものだが、現在では様相が一変。既に中国の大手企業が参入を狙って凌ぎを削っており、事の性格上、香港およびマカオ企業を一部参入させる予定には見えるが、残念ながら日本企業が入る余地は殆どないと思われる。唯一の道は香港かマカオの企業と組んで進出する方法だが、この点においても日本企業は強いとは思われず、中国でのビックプロジェクトに参入することは益々難しくなっている

またこのプロジェクトの真の狙いは別にあるとも言われている。それは前回紹介した対台湾政策の一環というもの。本来一ミリの領土割譲も絶対に許さない中国政府が一国二制度下とはいえ、マカオに中国本土の土地を一部でも管理させるということは一般的にはないこと。シンセンの前海も併せて、中国側の譲歩を示し、台湾へのメッセージにすることは大いにあり得ることである。果たしてこの作戦、功を奏するのか、いや、この横琴プロジェクトは成功するのか、これからも注目して見ていきたい。